



芦沼から美田へ

公益財団法人日本植物調節剤研究協会理事
北陸支部長

種田 貞義

春には田植機、秋には大型のコンバインが音を響かせ走り回る、質・量ともに全国有数の米どころ新潟平野。元来、新潟平野は大河信濃川、阿賀野川が長年氾濫を繰り返し上流から多量の土砂を運びできあがった海拔0メートルの低湿地である。ひとたび洪水が起こると長期間にわたり水が捌けず泥水に覆われた。中でも河口に近い低平地は、ほんの数十年前、昭和の始まで「芦沼」や「地図にない湖」と呼ばれていた。

このような湿地帯での稲作りは過酷を極めた。当時の記録を見ると条件の悪い圃場では田植えは腰や胸まで泥に浸かり、泥田を泳ぐように植えたということである。稲刈りもまた秋冷の中、泥水に浸かり重粘土質の泥に足を取られながらの重労働を強いられていた。刈り取った稲は船積し架木のあつる所まで運び乾燥した。この地帯における主な移動手段は船であり、そのため、無数の水路が縦横に走り、集落と圃場を繋げていた。この水路は移動手段だけでなく用水路、排水路としても利用された。

実際に昭和40年代中頃まで、平野のど真ん中にある農家の軒先に小さな木の船が吊してあるのをよく見かけた。古老の話では戦前まで田植えの苗運びや刈り取った稲束の運搬など農作業に使用していたとのことであった。

また、農民は自分の水田を少しでも高くしようと近くの潟の底に堆積した肥沃な土を船に乗せ客土するという気の遠くなる作業を毎年営々と続けた。客土一寸、一石の増収を信じて。しかし、ひとたび洪水が起こると長年の努力も一瞬にして泥の海に飲み込まれ永年に渡る苦労が無に帰していった。まさに賽の河原であった。

作家の司馬遼太郎は「芦沼」という当時の記録映画を見て著書「街道をゆく一潟のみち」の中で「食を得るというただ一つの目的のためにこれほど肉体をいじめる作業というの

は、さらにそれを生涯くりかえすという生産は、世界でも類がないのではないか」と述べている。

このような劣悪な状況を改良するための本格的な土地改良事業は第2次世界大戦後によりやく始まった。中でも当時、毎秒40トン日本海へ排水する能力を有し、東洋一といわれた栗ノ木川排水機場の完成が大きかった。その試運転では水位が1メートル近く低下したということである。その後、各地に大小無数の用排水路、排水機場が作られ、芦沼は変貌していった。水位が下がると次の問題はいかに水田として耕地整理するかであった。この地は先人が泥沼を個々に切り拓き営々と築いてきた血と汗の結晶である。区画整理にはその土地と他人の土地を交換しなくてはならない。そのために、あらゆる農家で激論が交わされたということである。この耕地整理は約10年にわたり測量・地ならし・新しい畦盛り・水路堀など農民総出の大事業として行われた。

これにより、農家の悲願であった水のない水田で稲刈りをするという当たり前のことが可能になったのである。この当たり前のことを行うため、先人達がどれほどの苦労をしてきたことか。その後、大規模な国営や県営の圃場整備が進み、かつての泥沼は乾田化し、50アールや1ヘクタール区画の美田となり、秋には日本一のコシヒカリが黄金色に稔り、日本有数の米どころに変貌することとなった。

しかし近年、その農地の真ん中には新幹線や高速道路が走り、都市近郊では大型店舗の進出や宅地化が進み血と汗の結晶の農地の改廃がすすんでいる。美田を夢見、芦沼と闘ってきた先人達はこの現状をどう見ていることだろうか。

我々も何事につけても現状が当たり前ではなく、当たり前を作り出した多くの人達の努力と苦労があったことを忘れてはならないと思っている。